

平成 22 年 5 月 25 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007 ～ 2009

課題番号：19730338

研究課題名（和文）外傷や疾病等による外貌損傷者の生活支援システムに関する社会学的研究

研究課題名（英文）A sociological study about the life support systems for the person of exterior damage by wound or illness

研究代表者

的場 智子（MATOBA TOMOKO）

東洋大学・ライフデザイン学部・准教授

研究者番号：40408969

研究成果の概要（和文）：

外傷や疾患治療後の傷あとという、生得的でない外貌の損傷は、当事者にとってはその後の人生に大きな影響を与える。医療現場においては疾患や外傷自体の治療が第一の目的とされ、当事者が治療後社会へ復帰していくうえで必要となるフォローまではまだ手が及んでいないのが現状である。わが国では、熱傷受傷者の唯一の団体として「熱傷フェニックスの会」が存在する。当会は熱傷協会からの独立とともに近年 NPO 化を果たし、会としての発展を目指していたが会として重要な構成員の変更などのため会の運営が停滞しているのが現状である。一方、世界で最も熱傷患者の治療数が多い韓国では、病院を中心とした支援団体が結成され、医療社会福祉士の支援も日本よりも確立されている。これらは熱傷受傷者全体の社会復帰にも関係しており、今後わが国の医療機関、患者団体においても、韓国の先進的な取り組みを参考にしつつ、わが国独自の支援システムをさらに構築していく必要がある。

研究成果の概要（英文）：

The damage of the exterior, wound and a scar after the disease treatment, gives the big influence for his later life. In Japan, we do not still have the follow-up systems after the patients recover and leave the hospital. Meanwhile, South Korea has so many numbers of therapeutic experiences for severely-burned patients that can offer diversified services. It will be necessary to build Japanese original support systems more in future while taking a Korean advanced action into account not only in the medical institution but also the patient groups.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	900,000	0	900,000
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	480,000	2,980,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：熱傷、身体、外貌、スティグマ、まなざし、患者団体、self help、韓国

1. 研究開始当初の背景

| これまで Body(身体)の社会的重要性は、

人類学では通過儀礼の分析を取り扱う際の重要な論題となってきたが、身体社会学は最近まで無視されてきた。しかし feminism, 先進社会の人口の高齢化、aging、ポストモダンの社会理論の出現 (Giddens, 1990, "Modernity and self-identity: Self and society in the late modern age"), 臓器移植のように身体に関して政治問題化する医療技術・医療業務の発達、身体の美こそ個人の価値であるとする大衆スポーツ・レジャーの増大など、文化的・技術変動が人間の身体を政治的かつ理論的論争の対象とされはじめている。

肌の色や鼻、耳の大きさ、頭髪の量、あばた、しわ、歯のゆがみ、妊娠など、これらの身体的特徴は生涯を通じて Body Image (身体像) に影響あたえ、Body Image の変化へと展開する。欧米では熱傷患者について心理、社会、看護、倫理の面などから研究がおこなわれている (Ablon, 1973; Fisher, 2001; Stouffer, 1995; Willebrand et al., 2001) 「治療の対象」としての見方に止まっている。

Chapman (1998) は質的・量的研究の双方を用いて physical, psychological, social の3点から HIV 感染者の body image、その変化に着目し、HIV がもつスティグマの内面化とその現れ、HIV 感染への彼らの複雑な思いを描いている。Thomson ら (2002) は、白斑患者への質的研究を行い、慢性でかつ Disfigurement を伴う疾患への応用可能性も示唆している。また藤澤 (1992) は、精神病患者会の会報を用いて、精神病のスティグマを付与された当事者が社会性喪失というスティグマからの解放を試み、社会を再び模索する過程を考察している。我が国においては、これまでに「外見」に着目した研究としてハゲ研究がある (須長 1999)。ここでは男らしさをジェンダー論に焦点が置かれ、その他には熱傷体験者や癌患者の体験記・闘病記 (太田, 2001; 古市, 2001; 熱傷フェニックスの会, 2001; 小林他, 2002) があるに過ぎず、Body Image の変容が生成した彼らの生きづらさに注目し、それへのサポート、社会の側に求められることまでをまとめたものは皆無であった (的場, 2006)。

2. 研究の目的

疾病や不慮の事故、外科手術等のために変化した外貌に関して、近年わが国では形成外科治療に加え、メディカルメイクやかつら、人工装填物 (エpiteーゼ) など、医療以外の技術も進められ、もとの姿に少しでも近づけるような技術は進歩してきている。しかし社会の人々からの好奇、嫌悪、同情の視線はいまだに変わらず存在し、外貌の変化による自己イメージの崩壊は、引きこもりや社会関係の遮断、断絶に繋がっていることも多く、精神

的なサポート、就労支援、また社会の側からのさらなる理解を得る活動も必要とされている。そこで本研究は、疾病や外傷のために外貌を損傷し、Body Image の変容をきたした者が life (生命・生活・人生) を再構築していく上で当事者たちが求めるニーズを把握し、諸外国の先進事例からも学び、わが国の社会文化的背景も考慮に入れた、彼らが必要としている生活支援システムについての発信を目的とする。具体的には、熱傷体験者や、癌治療の副作用で身体の一部、頭髪、体毛を失った者などに焦点を当て、彼らが社会生活を再開する上で必要とするサポート、社会の人々の彼らに対する理解を目的とした啓蒙・教育はどう行われているのか、またそれは誰によって、いつ提供されるのが望ましいのか、当事者・医療者だけでなく社会システム全体を視野に入れたマクロな視点から捉えることをめざす。

3. 研究の方法

日本および諸外国 (特にアメリカ、韓国) の文献資料の収集と解読、そして関連施設への聞き取りや参与観察によるフィールドワーク、さらには当事者、病院関係者、家族、患者団体関係者などへのインタビューをもとに進める。

4. 研究成果

外傷や疾患治療後の傷あとという、生得的でない外貌の損傷は、当事者にとってはその後の人生に大きな影響を与える。医療現場においては疾患や外傷自体の治療が第一の目的とされ、当事者が治療後社会へ復帰していくうえで必要となるフォローまではまだ手が及んでいないのが現状である。本研究では、外貌を損傷した者のなかでも特に「やけど体験者」に焦点をあて、日本で唯一の熱傷体験者の団体である「熱傷フェニックスの会」について文献資料と聞き取り調査から、会が結成され現在に至るまでの団体の変遷と現在抱えている課題について整理した。「熱傷フェニックスの会」は 2001 年に設立され、それ以来熱傷協会からの支援を受けてきたが 2007 年度に熱傷協会の解散が決まり、資金面での支援だけでなく物品、事務所スペースの提供も受けていた会にとっては専門職からの自律も含め、会そのものの建て直しを迫られている。一方、熱傷による外貌損傷は、当然のことながら日本だけの問題ではなく、同じアジアにある韓国でも熱傷患者に対する支援状況について現状を把握することに努めた。世界でもっとも熱傷患者を年間多数受け入れている漢江誠心病院の社会福祉士にヒヤリングを行い、韓国及び誠心病院の熱傷患者に対する社会的サポートについてのこれまでの取り組みについて調査した。また

(熱傷・家族・社会復帰・生活)などをキーワードとする韓国で発表された学位論文および韓国内出版物から、熱傷に関係した社会系学術誌から資料収集を行った。重傷熱傷体験者に対するグループカウンセリングを施した研究、重傷熱傷体験者の心理社会的問題に対する社会福祉士の介入に関する研究、重傷熱傷体験者の QOL に対する医療社会福祉士のニーズに関する研究などがあり、わが国の医療社会福祉領域では、重傷熱傷体験者に対するここまでの実証研究が行われていないため、今後のわが国の研究、実践においても大変有益な資料を得ることができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

的場智子、「정신 장애인시설과 지역커뮤니티에 관한 고찰 - 도쿄도 이타바시구의 사례로부터」、『아시아 경제위기 이후 사회복지의 발전』、2009(1)、549-552、2009年、査読有

的場智子、小澤温、内田祥士「クラブハウスモデルによる精神障害者地域生活支援システムの現状と動向 韓国における実践事例から」ライフデザイン学研究、東洋大学ライフデザイン学部、5巻、467-470 2009年 査読無

望月美栄子、山崎喜比古、菊澤佐江子、的場智子、八巻知香子、杉山克己、坂野純子「こころの病をもつ人々への地域住民のスティグマおよび社会的態度 - 全国サンプル調査から - 」厚生学の指標、第55巻(15)、厚生統計協会、6-15頁、2008年、査読有

的場智子「정신 장애인시설과 지역커뮤니티에 관한 고찰 - 도쿄도 이타바시구의 사례로부터 -」『아시아 경제위기 이후 사회복지의 발전』、2009(1)、549-552

[学会発表](計1件)

的場智子「정신 장애인시설과 지역커뮤니티에 관한 고찰 - 도쿄도 이타바시구의 사례로부터 -」韓国社会福祉学会 2009年4月25日、韓国・崇実大学校

[図書](計2件)

的場智子「生活と福祉」最新介護福祉全書2 『人間と社会 社会の理解』小澤温・秋元美世編、第1章 1-34頁 2008年 メヂカルフレンド社

的場智子「周囲の人々との関係 : サポ

ートネットワーク』『薬害HIV感染被害者遺族の人生』山崎喜比古・井上洋二編 7章 137-146頁 東大出版 2008年

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等(無)

6. 研究組織

(1)研究代表者

的場 智子(MATOBA TOMOKO)
東洋大学・ライフデザイン学部・准教授
研究者番号：40408969